

卒業論文要旨

鹿島灘砂浜域におけるベントスの分布特性と経年変化

沿岸域工学研究室

972035 清水 誠

〔目的〕

鹿島灘は茨城県東部大洗岬から千葉県東部犬吠崎までに広がる太平洋の海域である。この海域には日本有数の砂浜海岸が南北に広がっており、チョウセンハマグリに代表される二枚貝類が数多く生息している。これらは古くから沿岸の漁家経済を支える重要な漁業資源となってきたが、近年、二枚貝の漁獲量の著しい減少が問題になっており、港湾建設や各種海岸保全事業に伴う地形や底質の変化との関連が指摘されている。本研究では、鹿島灘砂浜域における底生生物の分布状況やその経年変化を調べ、海岸地形・底質粒径の変化による影響を考察することを目的として行った。

〔方法〕

底生生物の分布状況や経年変化を把握するための基礎データとして、茨城県水産試験場が毎年行っている採泥調査・汀線調査・貝桁網調査の結果を用いた。これらの調査は大洗から波崎までの砂浜域を対象として沿岸方向に約 4km 間隔、岸から沖合 1km まで約 200 m 間隔の測点を配して実施され、調査結果からは過去 20 年の鹿島灘浅海域全域での各種底生生物の分布状況を知ることができる。近年の調査結果のうち未処理のものについては、同試験場の協力の下、採取した標本の分類・整理を行った。これらのデータのうち主に二枚貝類に着目し、海岸地形や底質粒径に関するデータとの比較・検討を行った。

〔結論〕

大洗港の南側および鹿島港の北側では、沖防波堤の影響により砂が堆積し汀線が前進しており、これら二つのエリアで二枚貝類が多くみられた。また、鹿島灘砂浜域では全体的な傾向として底質の粗粒化が進行しているが、それが特に顕著な荒井～荒野では、底生生物が減少していることがわかった。